

かけがえのない場所

香川大学教育学部准教授 佐藤 盛子（昭和63年卒）

私の祖父は、小学校教師であった。その祖父から、学校にまつわるいろいろな楽しい話を聞いて育った私は、自然と教師になる夢を描くようになっていた。祖父は、家でも学校の子どもたちに勉強を教えていて、その中で医者になった方がいた。その人は、時々病院の勤務の後、診療バックを下げて「先生、また来ましたよ。」と祖父のもとを訪ねた。私は、「おじいちゃん、すごいなあ。きっといいことをしたんだなあ。」と祖父を尊敬した。また、町で偶然教え子に出会い、「先生！」と声を掛けてもらった日は、そのことを本当に嬉しそうに話していた。教え子たちが立派に社会で活躍している姿は、祖父にとって何よりの喜びであったと思う。そんな祖父は、教師という仕事のすばらしさを、身をもって教えてくれた。

祖父の影響を受けて教師を志した私は、夢を実現させるべく香川大学教育学部に入学した。ここで過ごした4年間は、本当に幸せだった。仲間と助け合い、できないことにも頑張って取り組んだ。私にとって、最大の壁は「水泳」であった。クロールの息継ぎができないのだ。息継ぎをしているふりはできても、息継ぎをしていないわけだから泳げない。よくて15m程度だったか。しかし、泳げない3人で夏中スイミングスクールに通い、秋にはついに全員が25mを泳げるようになった。初めて泳げたときのことは今でも鮮明に覚えている。必死で目指したゴールには後光が射して見えた。25mの壁は本当に高く、1人では途方にくれていただろう。仲間と励まし合い練習したからこそ、越えられたのだ。

無事に25mも泳げるようになり、日々の授業や教育実習などで多くのことを学び、たくさん遊び、悲願の教職に付くことができた。赴任したのは二番丁小学校（現新番丁小学校）だった。理科の全国大会の会場校で、全員が授業者であった。「川の生き物」がテーマだった私は、なかなか思うようにならない生き物たちと格闘しながら過ごした。休みの日は、クラスの子どもたちが遊びに来ることもあった。小学校から5分くらいの通学路の途中で自宅があったので、お母さん方も安心して「先生の家に行っておいで。」と送り出していたのだ。平日も休日もよく分からないような毎日だったが、本当に楽しかった。子どもたちや保護者の方、先生方、いろいろな方に助けられてやっと教壇に立つことができていたことを今でも感謝している。

その後結婚し、2人の子どもにも恵まれた。皆に助けられながらなんとか仕事を続けることができたのだが、教師になって15年目の頃ぐらいから自分に自信がもてず、「私は（教師として）だめなのではないか・・・このままではダメだ。」と不安でいっぱいになった。じっくり勉強することが必要だと思った。すると、校長先生が応援してくださって大学院に進学することができた。2度目の香川大学では、大学の先生方とともに学んだ仲間から、多くの影響を受けた。一旦立ち止まってこれまでの教員人生を振り返り、自分がやってきたささやかな実践を価値づけることができた。そのことで、これから先大切にしていきたいことが見えるようになり、「自分はこれからも教師をやれる。」という自信をもつことができた。

今年の春、3度目の香川大学。教えられる立場から教える立場になって、改めて夢をもつことの大切さに気づかされる。夢をもつのと、もたないのとでは、4年間の過ごし方や学び方が全く違ってくる。夢をもつことは、前に進む活力を生み出し、人を成長させてくれる。学生の皆さんには、これから先、失敗もあり、くじけそうになるときもあるかもしれないがそこであきらめずに、失敗を、夢を叶える糧にして欲しいと思う。決して一人ではなく、いつもどこかで温かく誰かに支えてもらいながら、夢に向かってのひたむきな歩みがあるということも忘れずにいて欲しい。このかけがえのない香川大学で、学生の皆さんと一緒に夢を描き、夢に向かってがんばっていききたいと思う。